

2、命紡いで



(桜花背に息子達と)

命は飲食からだ。

はたして、「PEG」からの人口栄養の補給を飲食と呼べるのか、どうか。それでも、ここに命の再生産がかかっている。

毎朝、介護人有田光雄の起床は6時、土曜、日曜、盆も正月もない。

「今朝は微熱があるし一寸寝ていたい。」

なんて贅沢は許されない。二人ともに、2〜3日、38〜9度の熱がつづいている時でも、一日も休めない洗濯物を干してる姿を想像できるだろうか。

「PEG」の準備と自分の食事準備を終えて午前7時、ヘルパーさん来宅で有田和子の起床。それが終わると、車椅子でベッドからリビングのテレビ前に移動。PEGのカテーテルをつないで、まずは、「経口補給水」400ccの注入が約1時間。それが終わると薬剤の注入。昼食は、補給

水が、「すっぽんスープ」、夕食は、「麦茶」に変わるだけだ。それから、最近、「PEG」用に開発された加圧バッグで、経腸用半固形剤「ラコー」(300グラム)の注入が約15分。

これが、「食事」に相当する全部の時間だ。

ほんのついこの間まで、

「美味しいか?」、と問えば、

「オイシイヨ」。

と、答えていた。いまは、まったくの無味乾燥だ。

嚥下のない「食事」では、朝・夕2回の口腔清拭の作業が欠かせなくなった。嚥下なき口腔には、唾液が変質、上顎から咽喉奥まで膜状にはりついて、放置すると気道を閉鎖してしまう。毎週、1回訪問ケアの歯科衛生師、西林さんは、

「これはお口の中のうんこと一緒に雑菌の塊です。」

と教えてくれた。そこで、まず、ケア用ゼリーを口腔全体に塗って湿らせる。ついで、ポータブル吸引機に吸入歯ブラシを装着、舌根や咽喉奥や上顎をゴシゴシ。終わりに「タンパク分解型除菌水」でもう一度、口腔全